

漱石『三四郎』導かれる者

Junko Higasa

まず、小川三四郎と里見美禰子の出会い。

『二人の女は三四郎の前を通り過ぎる。若い方が今まで嗅いでいた白い花を三四郎の前へ落して行った』このとき花を落した女が里見美禰子である。そしてのちに美禰子が教会に通っていることが明らかになる。そういう視点で見ると、この場面は聖母マリアが幼子イエスに、やがて来る受難を示す白い花を渡す場面と重なる。そして聖母はイタリア語で「マドンナ」、それを別の意味に変換すると「憧れの女性」となる。ここでは後者の意味から三四郎に三角関係の受難が始まる。

美禰子の三四郎への発信は「Pity's akin to love(同情は愛の同族)」であった。田舎から出てきて東京の喧騒感に孤独を感じる三四郎と、思う人(野々宮)との結婚話が進まない孤独感を持つ美禰子。彼女は「現状をどうしてよいか分からず、同情という一種の愛から引き合う者同士」として二頭の迷羊(Stray sheep)を葉書に描いた。しかし九州から上京する途中で見知らぬ女と同宿する羽目になって、まんじりともせず夜を明かし、別れ際に『あなたは余っ程度胸のない方ですね』と言われたほど女性に慣れていない無骨な三四郎は、それに気付かず、同情から恋愛へ踏み出す勇気がなかった。

次に、野々宮宗八と里見美禰子の別れ。

画家の原口が美禰子を描いた『森の女』が出品された展覧会で『野々宮さんは目録へ記号しるしを付ける為に、隠袋かくしへ手を入れて鉛筆を探した。鉛筆がなくて、一枚の活版摺ずりの端書が出て来た。見ると、美禰子の結婚披露の招待状しょうたいじょうであった。披露はとうに済んだ。野々宮さんは広田先生と一所にフロックコートで出席した。三四郎は帰京の当日この招待状を下宿の机の上に見た。時期は既に過ぎていた』

野々宮が目録に記号を付ける行為は、絵画の「購入候補」を意味する。すなわち薄給の理学者の野々宮は美禰子を娶るつもりでいたが、それを手に入れるだけの経済的準備が整わないうちに、金持ちの別の男に売ってしまったという状況を物語る。

そして『森の女』は、里見美禰子から小川三四郎へのメッセージである。

会堂チャーチから出てきた美禰子は三四郎に、ヘリオトロープの香りがするハンカチを差し出した。その花の持つ意味「献身的な愛」はギリシャ神話で羊飼いの守護神アポロンをめぐる「三角関係」に由来する。美禰子は三四郎を結婚披露宴に呼ばなかった。その代わりに三四郎と出会った時の姿を画に封じ込めた。画は三四郎へのメッセージである。「人間は放っておいては迷ってしまう者、故に導かれる者」三四郎は、野々宮との三角関係に囚われ、Stray sheep の美禰子を導くことが出来なかった。美禰子は画を通して三四郎に伝えている。「あなたは余っ程度胸のない方ですね」と。(2016.10.14)